

第5回クオリア AGORA2015

2015年11月26日 於 楽友会館

☆ テーマ

「西欧文明からの転換～アジア太平洋文明を考える」

☆ スピーチ

立命館大学環太平洋文明研究センター長

ふじのくに地球環境史ミュージアム館長

国際日本文化研究センター名誉教授

安田 喜憲さん

長谷川和子（京都クオリア研究所）

世界中を震撼させた「3・11同時多発テロ」、そしてつい最近の「パリ同時多発テロ」と、テロへの危機が世界中に広がっています。私たちは戦後70年、豊かで幸福な毎日を過ごすことができましたが、一方で大きな格差を生み出してきました。この格差を象徴するテロを克服し、次の時代に向けてどのような価値観を導き出したらよいのか、第5回クオリア AGORA では、立命館大学環太平洋文明研究センター長の安田喜憲さんをスピーカーにお迎えしました。

安田さんは、国際日本文化研究センターにおられた時に、世界の4大文明、中国といえば黄河文明なのですが、稲作中心の長江文明の存在を明らかにされました。また、富士山と三保の松原が世界遺産に登録された静岡県で、来年春オープン予定の「ふじのくに地球環境史ミュージアム」の館長として超多忙な日々を過ごされています。環境考古学のパイオニアである安田さんに、西欧文明に代わる新たな文明をどう切り拓いていったらよいか、を考えるヒントをいただきたいと思えます。

安田 喜徳（立命館大学環太平洋文明研究センター長

ふじのくに地球環境史ミュージアム館長）



1、勤労感謝の日

一昨日、11月の23日は、「勤労感謝の日」ということで休日でした。では、お年寄りの先生方はいいです。会場の若い人に聞いてみようと思いますが、この元になったのは何の日ですか分かりますか。え、わからない。勤労感謝というのは、労働者を称える日でしょうか？なら、何でこの日なのかなあ。メーデーが5月1日なのだから、この日にすればいいじゃない。何で11月23日が勤労感謝の日なのか。ご存知のように日本は太平洋戦争に負けて、そして、アメリカが日本にやってきて、彼らは、日本の神道が第二次世界大戦を起こした元凶だ。だから、神道の中心となるような世界観を潰そうと。で、実は、11月23日というのは、その日本の神道にとっては最も重要な日なのです。これ、何の日かと言うと「新嘗祭」が行われる日なんです。

もう、若い人は、新嘗祭といわれても、何もわからないと思えます。実は、ぼく、東京ですね、立命館大学の創立者である西園寺公望にちなんだ「西園寺塾」というのをやっております、それ、どういうものかと言うと、40代から50代の、10年後ぐらいにはその企業の社長になるような人を集め、講師を呼んで勉強会をしているんです。それでびっくりしたんです。勤労感謝の日

は、戦前は何だったかを聞いたら、誰も知らない。アメリカのレーバーデーを真似したものかと思っていたというようなことをいいます。日本の神道では最も重要な日なんです。秋の終わりに、なぜ新嘗祭があるかという、新米が穫れるでしょう。その新米を神様に捧げ、豊穰を感謝し、来年の豊穰をお願いするわけです。そういうお祭りです。11月の21、22、23には西園寺塾の京都のエクスカッションで、上賀茂神社の田中宮司と乾権宮司のおはからいで、塾生を連れて上賀茂神社に行きました。上賀茂神社では、新嘗祭の祭祀が行われるんです。その時、宮司さんが神様を呼んで、その年穫れたお米、野菜、魚、山で捕れたヤマバトやキジですね、そういうものをお供えます。

実は、人間は生きるために食べなきゃなんない。その時、炭水化物だけでなく、人間はタンパク質を食べなければいけない。そのタンパク質を何で摂るか。私たち日本人は、タンパク質を主に魚介ですね、魚と貝。それと、野や山のイノシシやシカ、キジなんかから頂いているわけです。人類の歴史には、それと違いもうひとつ、肉からタンパク質を摂る人たちがいます。ヒツジやヤギを食べ、ミルクを飲んでタンパク質を摂っている。炭水化物はパンです。そういう人たちをぼくは、「畑作牧畜民」と言っていますけれども、つまりそういう人たちがやっているライフスタイルが、現代の文明、今の世界を席卷しているわけです。

ぼくは、ノーベル賞を出しているスウェーデン王立科学アカデミーの会員です。ノーベル賞を渡されるグスタフ国王は、とても環境問題に熱心で、毎年、1週間から10日ぐらい、世界の一流の研究者をお呼びになって、いろんなところで泊り込んでシンポジウムを開催されています。私は、グリーンランドとストックホルムの北にあるハイランドというところに2回招待されました。朝晩、食事も国王と一緒に食べるんですけど、ぼくは、その時、国王に、「天皇陛下は、田植えや稲刈りをされる」というお話を紹介したのです。すると、国王は、とても驚いて「天皇が田植えや稲刈りを...」ってすごく驚かれた。その驚き方が強い印象に残っており、そのことで、ぼくは「畑作牧畜民のリーダーは、労働をしないんだ」ということを、初めて知りました。労働は庶民がするもの。これが、畑作牧畜民なのです。稲作漁撈民のリーダーである天皇は、田植え、稲刈など労働をご自分でなさるといことなんですね。その日本の神道の最も重要な日が、11月23日の新嘗祭なんです。これが、日本ではずっと続いてきたんですけども、1945年、戦争に負けたら、日本人はギブアップして、勤労感謝の日になってしまった。

もう、若い人は誰も知らない。若い人ばかりでなく、ぼくらも、高田先生、長谷川さんなんかもそういう世代なのだろうと思いますけど、アメリカナイズされた「横文字世代」ですね。横文字で書いたものは何でも正しい、縦書きのものは間違っていると思っていたんです。きょう、立命館大学に、たまたまね、アメリカの大学を卒業した女性が秘書をしてくれているのですが、やはり、新嘗祭を知らなかった。「こんなすばらしいお祭りが日本にあったのか。カボチャなんかは穫れたことをお祝いするハロウィンと同じだ。収穫祭ハロウンはこんなに広まっているのに、日本人はなぜ新嘗祭を祝わないのか」と言っていました。まあ、これまでは、これをおかしいと思わなかったんですね。それが、最近、おかしいな、戦後70年経って、やっと気が付き始めたんですね。

2、稲作漁撈文明の価値の再発見

それともうひとつね、上賀茂神社の御祭神は賀茂別雷大神っていいですが、そのお祖父さんは八咫鳥なんです。八咫鳥って、この近くの熊野神社の旗とかに描かれている3本足のカラスです。お米とタンパク質に魚介や野生の動物など食べる「稲作漁撈民」は、太陽を崇拝したんです。その最高神は天照大神ですね。われわれの太陽の神様は女性なんです。ところが、例えば中国の畑作牧畜民が作った黄河文明の太陽神は男です。もっと知っているのは、ギリシャ神話。太陽の神はアポロンですね。これも男です。戦後日本では、小学や中学でギリシャ神話は教えても日本神話は教えなかった。一生懸命、ギリシャ神話のことを覚えたけど、その隣で太陽に手を合わせているお祖父さんのことが、何でそんなことをしているのかわからなかった。それが、ようやくこの歳になって、やっとその重要さがわかってくるんだけど...。まあ、戦後、とんでもない教育を受けてきたということなんですよ。

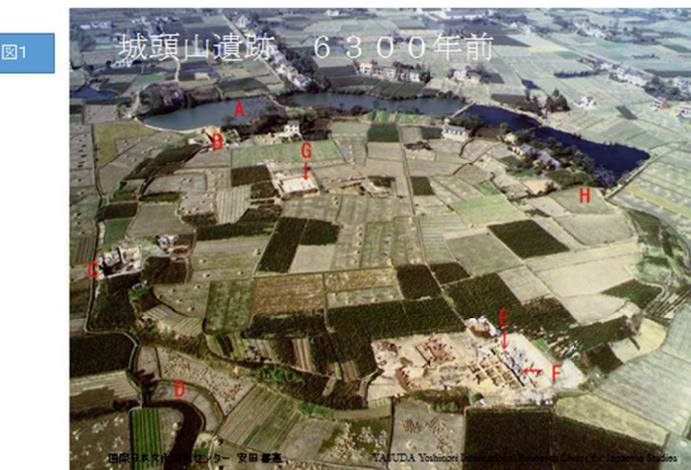
ですから、日本人のルーツとなる新嘗祭を、宣伝する人はあまりいないんですけど、で、ぼくが宣伝せなあかんと思ったのが、さっきの八咫鳥。何で足が3本あると思いますか。日本のサッカー協会のシンボルにもなっていますが、初代の会長が熊野神社の関係者だったんです。これは球をよく蹴れるからというわけじゃないんですよ。実は「三」というのは、稲作農耕民の聖数なんです。「日本三山」、「日本三景」っていうでしょう。これ、聖なる数なんです。なぜか「一」は孤立、「二」は対立、そして「三」は和をなす。和のシンボル。だから、われわれ「稲作漁撈民」にとって聖なる数として重要なんですよ。こういうこと、みなさん知らないですよ。

それで、上賀茂神社は、奈良の葛城山から来た。そして桂川と鴨川が合流する淀に来て、それから、鴨川の上流に行ったんです。それを持ってきたのは秦氏で、静岡県知事をしている川勝平太さんの御先祖ですね。そのルーツが、実は雷の神という。つまり、神武天皇が、葛城山にやってきた時、八咫鳥の案内で行ったところです。この葛城山は、日本の山岳信仰の開祖の役小角という行者が修行をしたところなんです。ぼくは、もう長い間、日本の山岳信仰は長江文明がルーツだと考えているんですけども、そのことが、実証されるようになってきた。

思えば、とんでもない世界史を勉強してきたんです。きょうは、若い人もいることですので、ちょっとこの話をしたいと思います。私は、広島大学で42歳まで助手で、万年助手って覚悟を決めていたんです。それで、日文研に来て、ぼくの人生が開いたんですよ。実は、私は、それまでは、ギリシャやローマの畑作牧畜民の研究をしていた。ご他聞にもれず、ギリシャ、ローマが文明のルーツだ。これをやらなきゃいけないと思っていました。ところが、日文研に来て、梅原猛先生から「西洋のことばかり見ているは、人類史の本質はわからない。東洋の稲作の勉強をしろ」と言われた。東洋の稲作って言われてもね、ぼくは小さな時から田植えもしたし稲刈りもして、何にも珍しいことあらへん。そんなもの、何でいまさら研究しなけりゃいけないんだ、と最初は思いました。でも、梅原先生は、中国へ行けという。それで、最初はいやいやだったんです。

でも、日文研にとってもらったから、反抗はできないから、仕方なく行った。

この写真が、(図1)「城頭山遺跡」です。6300年前の遺跡です。円形の城壁があるでしょう。後ろには溜池があって稲作をやっている。今でも、ここには人が暮らしていて、緑色の風景です。ところが、この(図2)「肥沃な三日月地帯」と言われ、みなさんが世界史で習ったところの写真です。岩山ばかりのところ。これが世界



史で憶えた「肥沃な三日月地帯」の現在の風景です。人類文明のルーツは、メソポタミア、インダス、エジプト、黄河の四大文明だと教えられた。それは、パンを食べてミルクを飲んで肉を食べる畑作牧畜民の文明ですよ。それが、人類文明のルーツだと教えられた。

図2が「肥沃な三日月地帯」の現在の風景です。「肥沃な三日月地帯」という名前が付いているので一度はおとずれて見たかった。でも世界史の先生が言ってることは嘘でした。こんな岩だらけの大地がとても肥沃な三日月地帯とはとてもいえない。

ヨーロッパ人はパンを食べてミルクを飲んで肉を食べていま



すから、それと同じようなライフスタイルを持っているメソポタミア、インダス、黄河、エジプトを人類文明の出発だと指摘したというのは理解できるわけです。でも、そんな世界史の授業では、西洋文明の受け売りにすぎず、稲作漁撈社会は理解できない。

マルクスは稲作漁撈社会に代表される社会を「アジア的生産様式」と呼んだ。稲作漁撈社会を封建的で遅れた社会と裁断したマルクスですが、その『資本論』をどこで書いたか。大英帝国の大英博物館の図書館です。でも、マルクスは、東南アジアの稲作漁撈社会さえ見ていない。日本にはもちろん来ていません。東南アジアの稲作漁撈社会さえ、いっさい触れていないんです。そんな稲作漁撈社会の本質を知らない人間が書いた『資本論』を金科玉条のようにして、われわれは学園紛争をやったんです。それがわれわれの世代ですよ。ほんとに、われわれの人生というのは、強い欧米文明の影響力に圧倒された時代を生きた人生だった。それに反対するものは、私なんかのように42歳まで助手をしなきゃいけない。そんな社会でした。

3、森里海の命の水の循環を維持した

稲作漁撈民が何を崇拜したかという、それは玉です。金銀財宝は余り崇拜しない。どうして

図3



アメリカ・インディアンを彷彿とさせる
良渚の玉琮に彫られた神獣人面文様

玉を崇拜するのか、最初よくわからなかった。例えばこの図3の画像ですが、これ、直径3センチです。鳥の羽根の飾りをつけたシャーマンが、虎の目に触っているんです。これ直径3センチですよ。こんな細かい細工、しかも硬い石に浮き彫りになっている。こんなものが5千年前にできたなんて、誰も思わない。多分、「漢代」だろうな、と中国人の考古学者も思っていた。ところが、放射線炭素年代測定では、5千年前、6千年前ということ

になったんです。メソポタミア文明やインダス文明と同じものだということが明らかになった。しかも、体には渦巻紋様が描いてある。そして、足は鳥の三本指の足です。八咫鳥と一緒です。「三」が整数だということわかる。つまり、アメリカインディアンの人と同じように、鳥の羽根を飾った帽子をかぶっている。どうして鳥を崇拜したか。鳥は天と地を往来するからです。稲作漁撈民にとっては天地の結合が重要だったのです。

では、玉は何のシンボル？ これがわからなかった。10年間、わからなかった。それで、長江文明の神話に「山海経」というのがある。黄河文明の神話は司馬遷の「史記」です。長江文明の神話は「山海経」です。そこでそれを読んでみた。すると「何々山には何々玉が取れる」と。玉が32も書いてある。ああ、そうか、「玉は山のシンボルなんだ」そう気づいた時、もうすべてがわかった。

一生懸命思い悩んだりした時、突然ある時、ひらめくことがある。「長江文明の人々はなぜ玉を大事にしたのか」、その答えが啓示のように、やってきたのです。アテネオリンピックが開催された2004年でした。巷では「栄光への懸け橋」という歌が流れていました。

お米を作るには水がいります。水は山から川となって流れてきます。豊穰儀礼の時、その大切な山を里には持ってこれないので、その代わりに、川原でとれる石【玉】を持ってきたのではないか。その玉に加工して豊穰の儀礼をおこなったのではないかと考えた。そうしたらね、すべてが解けた。稲作漁撈民は、森里海の「命の水の循環系」を大事にした。これが、もう一つ私が、皆さんに、きょう知ってもらいたいことです。稲作漁撈民の神話である日本の神道が大事にするものは、「柱」です。これも天と地を結合するものです。山も柱と同じように天地を結合している。例えば会津磐梯山、東北の山岳信仰のメッカですけれども、僧・徳一が山岳信仰のメッカにした

この会津磐梯山は「^{いわはしご}磐梯子」でしょう。鳥も天地を往来する。つまり、天地を結合するということが稲作漁撈民にとっては非常に重要なことだったので。



図4は玉で作った玉琮^{そう}というんですけど、全部、丸と四角の結合となっている。これは、古代の中国の天文訓の中に「丸は天、四角は地」と書いてある。つまり丸が天で四角が大地というのは中国人にとって当たり前のことなんです。だから、玉^{そう}琮がいつも丸と四角の結合になっているのは、天地の結合を現しているんです。天地の結合こそが稲作漁撈民の重要なことであって、そ

れが、森里海の命の水の循環系を維持するうえで大変重要な要素なんだということが見えてきた。

日本というのは列島ですけれども、生物の多様性に満ち溢れているんです。生きとし生けるものの命に溢れているわけです。こんなに小さくて、先進国で、ものすごい文明の高さを維持しながら、生きとし生けるものの数が、圧倒的に多い。それはどうしてか、それは命の水の循環系が維持されているからです。

4、富士山が世界文化遺産になった

富士山が世界文化遺産になりましたね。富士山を世界文化遺産にする時、ヨーロッパ人から、「富士山はいいとしても、45*も離れた三保の松原はいかがなものか」ということをいわれた。こりゃ、東洋の文明の本質を理解してないなあと思いましたよ。それで、この二つは命の水の循環でつながっているということを一生懸命アピールしたんです。三保の松原には「羽衣の松」というのがあります。富士山から天女が三保の松原にやってきて、そこの松に羽衣をかけていった伝説なんですけど、これが、富士山と三保の松原のつながりを象徴しています。

2013年の6月22日にカンボジアのプノンペンでその世界遺産の最終会議があつて、ぼくは、前のカンボジア大使に「何とか、三保の松原も世界遺産にしてください」と頼みに行つたんです。そうしたら前大使は「安田さん、三保の松原も遺産にしてくれという、富士山まで影響受けて、もし、富士山が世界遺産にならなかつたら、あなたは日本に帰れませんよ」って脅された。大体、「ICOMOS (国際記念物遺跡会議)」っていうのは、世界から1500人ぐらい大使をはじめ関係者が来てるんです。だから、会議が長引くと、もう止めにしようということになるんです。でも、ぼくは屈しなかつた。そうして、会議が始まつたんです。そしたらね、これも、日本人が、いかに自分の文明のルーツに自信がないかという表れなんですけど、申請は最初「富士山・信仰の対象と芸術の源泉」という副題をつけていた。ところがね、文化庁のお役人が「信仰ってのは、まじいんじゃないか。ICOMOS のある UNESCO は一神教の国が大半だから、この副題はとつた方がいいんじゃないか」ということで、富士山だけで申請した。そしたらね。「どうして、副題をとつたんだ」と各国の大使が言うわけです。まず、「それを復活しなさい」というところから始まつた。

実は、その時の会議の議長になるカンボジアのソク・アン副首相を、06年ごろからからぼくはよく知っていて、それで、彼が議長になるというので、ぼくは何とか三保の松原も世界遺産にせないかん。それで早選手紙を書いたんです。世界遺産のアンコールワット、皆さんご存知ですね。これ、王様が住んだアンコールトムと対になっています。アンコールワットって、何の神様を祭っていると思いますか。東側にプノン・バケンという山があるんです。その山の神を祭っている。だから、王様は毎年1回、その山の磐蔵に行つてお祈りをしたんです。王様の住むアンコールトムとアンコールワットは近接しているんですけど、その間に大きな環濠がある。ここは、11世紀の段階で世界一人口が多かつた。だから、もう、環濠の水は当然、ドロドロに汚れていると思つていた。ところがね、たまたま、2007年に、環濠の一部が干上がり、その土を採つて珪藻とか昆虫と

か分析したんです。それ、森勇一先生が分析されたんですけど、森先生はこういうんですよ「安田先生、この水は飲もうと思ったら飲めますよ」と。これには、びっくりしました。世界一人口が多いところの環濠です。どろどろのうんちで汚れていると思った。ところが、それが飲もうと思えば飲めるレベルだった。これは、稲作漁撈民が、森と里と海の命の水の循環をいかに大切にしたかというシンボルと思った。

それで、そのことを手紙に書いて、ぼくが Springer というところから出した「Water Civilization」という本と一緒に送った。手紙には「この戦いは、西洋と東洋の闘いだ」と。そして、「45^年離れた三保の松原を世界遺産にしないというのは、西洋の軍門に下ることだ」と書いた。これでもう、会議が始まる前に方向は決まっていたと思います。こうして、富士山と三保の松原が世界遺産になったんです。

で、今やっていることは何かというと、日本の稲作漁撈民と同じような世界観を持っているのは、中南米、マヤとかアンデス、アメリカインディアンもそうです。これらの人々は、われわれとよく似た世界観を持っています。もちろん、カンボジアのクメール文明もそうです。共通しているものは何かというと、女中心の文明です。男中心じゃない。つまり、命を生み出す女性が活躍している文明。これをぼくは、「環太平洋生命文明」と言っております。

5、西洋の没落

男中心の西洋の文明は終わりは始めている。私や高田先生が憧れた西洋、そうして一生懸命勉強した西洋文明。今はもう、西洋文明は死には始めているのではないか。パリでは自爆テロが起こり、シリアからは、100万人以上もの難民がヨーロッパに押し寄せている。もう、後10年たったら、ヨーロッパはガタガタになるのではないかと思います。アメリカはまだ西洋文明の影響を引きずって生きてますけど…。でも、次の時代は、西洋に代わる新しい文明の時代ではないかと思います。それは、東洋の時代で、稲作漁撈民の時代です。畑作牧畜民から稲作漁撈民へと文明は大きくシフトする。そういう転換期にわれわれは差し掛かったなあというのが、ぼくの今の考えです。まだ、言い足りないことは、この後のディスカッションなどでお話したいと思います。

★ テーマ

「西欧文明からの転換～アジア太平洋文明を考える」

▽ディスカッション

荻野NAO之(写真家)



普段ですと、私はモデレートに徹するところなのですが、きょうは、ディスカッサントが高田さんと山口さんのお二人ということなので、私も、若干質問を出しつつ、ディスカッションに加わるということで始めたいと思います。私も、前にもこの席で話しましたがけれども、過去メキシコという国に10年ほど住んでおまして、マヤ文明とかアステカ文明というものを身近に見て暮らしておりました。その中で、私の写真家としてのテーマは、三つあって、ひとつは、「モンゴロイド文化圏の暮らし」。まさにさっきの地図の波線の部分のところですね。それが一つのテーマ。二つ目は「妹の力」といって、柳田国男という人も取り上げている女性の勘が鋭いとか母性とか、つまりシャーマニズム的な力っていうものもテーマにしております。そして三つめは、

はざま

「間」っていうことなんですけど、1でも2でもないところをどうやって見ようかなと思って「はざま」ということをテーマにしているんです。まあ、ここのところ、この三つを活動のテーマにしております。

それで、私からの質問なんですけど、西洋文明から東洋文明への転換の時だというお話がありました。それで、過去の東洋と西洋の文明の変遷を見てきた時に、その周期的なものがみえるとおっしゃっている方もいて、その周期は、800年とか1600年だとか、まあ、そんな周期があるにせよないにせよ、おそらく過去、西洋の文明と東洋の文明といえるようなものが反転した、転換した時というのは、これ、今ばかりではなく、以前にもあったんだろうと思うんです。それで、過去そういうことがあったとすると、それは何がきっかけでどういうふうにかかったのか、ということです。これご存知の方があれば、それをヒントにして現代のわれわれの時代の転換ということを見据えられたらいいなと思います。山口さんからいかがでしょう。

山口 栄一(京都大学大学院思修館教授)



安田さんのスピーチは、日本人のルーツを含めて私にさまざまなインスピレーションを与えてくれました。ありがとうございました。

どうやらアフリカで生まれた人類は、数万年前にアフリカを出て、中央アジアぐらいに滞留し、それからヨーロッパに行った人々とアジアに行った人々に分かれた。このアジアに渡った人々がついに長江にたどり着いて文明を育んでいったということなのですね。

そこでぜひとも5つ質問させてください。

素人の私が勝手に夢想することは、その人々がさらにそこからどのようにして拡散して行ったかということです。この環太平洋文明圏がどういう風にして広がっていったのか。ちょうど1万年前ぐらいだと思うんですけど、環太平洋文明圏を創った源は、長江文明の人々なのでしょうか。それが1つ目の質問です。

2つ目の質問は、マダガスカルの人々のルーツです。私は、若いころからずっと不思議でした。彼らは、明らかにインドネシア人の顔をしています。きっとルーツは、東南アジアの人たちだと思います。だから、私の夢想は、1万年前ぐらいに東南アジアの辺りに強大な文明があって、彼らは海に乗り出すぐらいの冒険野郎。そして冒険のはてに、頑張ってインド洋をはるか渡ってマダガスカルにたどり着いて、そこに、自分たちの終の棲家を見つけたのではないかと思っているのです。もしかしたらその源は長江文明なのでしょうか。

それから、3つ目の質問です。これも、私の勝手な夢想なんですけど、長江とかクメールの冒険野郎たちは、ポリネシアの島を渡りながら東へ東へと行くわけですよ。たぶん最終的には南米にたどり着いたと思うんです。南米には、もともと、ベーリング海峡を歩いて渡って北米を通り抜けてきたアメリカ先住民たちも行きついていて、そこで両者の混交が行われたのではないかと。南米の先住民が北米先住民とは顔が違うのは、そのせいではないか。このことを専門家の見地から教えていただけないでしょうか。

それから4つ目の質問です。長江文明の人々は「山の民」だと伺いました。もしも彼らが、海に乗り出すよ

うな冒険野郎だとすると、なぜ山の民が、「海の民」になったのか。それから、オーストラリアにいる先住民だけが異質ですよ。彼らはネグロイドです。何であそこにネグロイドがいるんだろう。

最後の質問です。間違いなく日本人のルーツって、この長江とかクメールとかの海の民の冒険野郎たちだと思うんですね。そこで、縄文文明が開いた。明らかに、あの模様はそういうことを物語っていると思います。まとめると、マダガスカル、日本、南米のルーツは、この長江文明、そしてクメールの民なのではないか。専門的な観点からこの夢想を正していただけるとありがたいです。

**安田 喜徳(立命館大学環太平洋文明研究センター長
ふじのくに地球環境史ミュージアム館長)**

まず、荻野さんの質問。文明に周期というものがあるかどうかはわからないが、文明が転換するきっかけは何か、どう起こるかっていうことだったと思いますが、文明の転換は周期で起こるわけではないんです。東洋が西洋、その反対にシフトするというのは、これまでも何回も起こったんだけど、それは、その時に必ず、大きな危機があるわけです。危機がなかったら、人間というのは、新しいライフスタイルを採ろうとしないんです。だから、今、われわれが採っているようなライフスタイルは、欧米人が作った。これ、どうして受け入れたかという、明治維新とそれから特に第二次世界大戦の敗戦という危機があった。だから、一途に受け入れたのです。



これから、西洋の人たちが、東洋の英知に学ぶって行って、京都は、観光客が、バートと増えているのもわかると思いますが、その価値はわかってきた。しかし、それを、彼らのライフスタイルに採り入れるかという、そう簡単じゃない。だって、スペイン人やポルトガル人が南米に行って、メキシコを支配した。その時だって、やっぱり何百万人っていう人間がヨーロッパでは死んだんでしょ、疫病や結核で。危機なんです。そういう危機の時代を経て、次は、東洋の時代が来る。これは間違いないと思うんだけど、その前に危機を経ないといけない。だから、今のようライフスタイルを持続しようと思う意思が強くなる限りは、なかなか新しい時代は来ない。それを変えるものは何かという、それは地球環境の問題。環境の変動。これが大きい。

今までの文明の歴史を見ているとね、A という文明から B という文明に、流れとして変わる時は、危機の時代。それは、人間ってのは、やっぱりね、自分の今の安寧したライフスタイルに固執するんです。COP21でもですね、地球の平均気温の上昇を2℃以下に抑えなければと言いつつ、やはり、今のライフスタイルを維持したいんです。こりゃ、人間の性なんです。だから、それがガラッと変わって、東洋的な世界観、生きとし生けるものと共に、この地球で千年も万年も暮らしていけるような、そういうライフスタイルをね、それを採るには、危機感がなければ絶対できない。今のよう、安寧が続いている限り、人は絶対動かない。口では言ってるよ、ぼくもいろいろ言ってるが、あんたどうだと言われても、危機の時代が来ないと絶対できない。辛いですよ。

荻野

その時に何かこう、ヒントみたいなものはありますか。東洋文明の人たちができること。

安田

ジャック・アタリって人がいるじゃない、フランスで。ぼくはいっぱい本を書いているけど、ジャック・アタリほど売れないんですよ。、彼が何を言うてるかという、人類が最終的に平和な時代に目覚めるためには、今までは想像もつかないような戦争を体験しなければならぬ、と書いているわけです。それは、核戦争です。それで多くの人々が死ぬでしょう。多くの人々が死んで、やっと、東洋的な生きとし生けるものと共に暮らすその価値観一平和になり、他者の幸せを考えながら、利他の心、慈悲の心をもって生きる、そういうライフスタイルに目覚めると、いうふうにジャック・アタリは書いている。その本が何百万部も出ている。ぼくも、東洋的なものが大事だと書いているけど、ちっともぼくのは、売れないなあ。

荻野

危機が来れば売れますよ。

安田

確かに…。100年後、200年後、少なくとも50年後には、そういう危機が来るだろうと思っています。2030年

ぐらいからおかしくなるんじゃないか。もうぼくらは死んでますけど。でもね、最澄さんっているでしょう、天台宗の。やっと大乘戒壇院設立も認められ、最澄さんが正しいと奈良の仏教徒が認めたのは、死んでからですよ。生きてる間は、全くもって評価されなかった。梅原さんさえもね、最初は空海だった。ぼくがいくら「最澄は、偉いですよ」といっても、「あれはちょっと変わつとるからなあ」といっていた。まあ、最近では、ずいぶん評価を認められていて、その「山川草木悉皆成仏」とよく言っておられますからね。その国土悉皆成仏の「天台本覚論」の生きとし生けるものと共に生きるという、その価値をちゃんとわかるのは日本人ですよ。その日本の精神に、多くの人が跪くんじゃないかとぼくは思うんだけど…。

だって、あの英帝国、イギリスは、中国マネーの前に跪いた。そのヨーロッパの代表的な英国を跪かせた中国人は、何の前に跪くか。それは日本の精神に跪くと、ぼくは思っている。でも、ぼくもそうだけど、みなさんは、物質エネルギー文明の中にいるから、物質エネルギー文明なしには一時たりとも暮らせないと思うんだ。だから危機が来ないと、なかなか、今の安寧を得ている物質エネルギーに依存する暮らしを捨てられないと、ぼくは思う。

荻野

山口先生の質問に対してはどうですか。

安田

そうですね、長江文明からあらゆるものが派生したというのは当たりです。日本の縄文も評価せないかんよ。縄文はね、1万6500年前に土器を作った。それで、ぼくも間違えていたけど、文化のルーツは南からきたといわれていた。ところがですね、最古の土器はどこから見つかったかという津軽半島の先端です。さらに最近、最古の土器が北海道の十勝平野で見つかっている。だから、縄文文化は北からと南から、両方から波が来ている。しかも大事なことは、1万6500年前の土器の厚さは、わずか5ミリ以下です。こんな薄い土器を作っている。これ、エジプトでは、7000年前の土器の厚さが1センチもある。このことは、こないだネイチャーの論文で紹介されたんですけど、土器のルーツは日本で、アンデスの方にも余りにも似た土器がいっぱいあるんですが、日本から、土器の分布は世界中に広がって行った。これ、日本はすごいですよ。これは欧米人も認めていることです。

それから、長江の人たちが海に乗り出して行った話ですが、これ、わかっています、まず、台湾に行った。それから、メラネシア、ポリネシア。それで、ぼくは、「南の道」があると思うんですよ。モンゴロイドって、北の道ばかりでしょう。イースター島に行ったのが5世紀ごろと言われているんだけど、もっと前、旧石器時代に、彼らが南太平洋を通過して、南米に至ったと思うんです。これ、偶然なんですけど、アンデス文明の始まるのが4000年前なんです。そして長江文明の崩壊が4000年前なんです。だから、これは深い関係があると思うんです。でも、そんなことは、日本の考古学者は誰も認めていない。

山口

マダガスカルはどうでしょう。

安田

それは、難しい。どうかなあ、インド人ではないかなあ。

山口

それはきっと違うと思うのです。彼らは、インドネシアとかカンボジアの顔をしています。東南アジア人です。

高田 公理（武庫川女子大学名誉教授）



マダガスカルでも米は作っているんですか。

山口

それはわかりませんね。でも、アフリカとは全く文明が違う。

安田

東から行ったってことは、多分間違いないでしょうね。ちょっと、そこまで調べ

られていない。新大陸までは行ったけど、アフリカまで視野がない。

山口

オーストラリア、アボリジニはどうですか。

安田

これも、古いが、ちょっとそのルーツまではわかりません。日本の旧石器時代人も多分、おそらく同じだと思うけど…。

高田

彼らは今なお、狩猟採集民としての相貌を持っているようですね。

山口

いずれにせよ、この巨大文明を作ったルーツは長江文明ということですね。

安田

そう、それはそう。だから、長江文明、日本の縄文、これは評価しないといけない。こないだ、NHKで縄文の特集がありましたけど、縄文って、1万3000年続いているわけでしょう。この持続性の中に価値を見出さなきゃなんないって言うてるんだけど、日本の考古学者は、絶対そういうことは言うてはならない。テレビにぼくは出なかったけど、でも、ぼくのこの説が言われていた。だんだん、理解されてきているということだと思っていますけど。

高田

めちゃくちゃ面白く聞かせてもらいました。その話の最後に危機の話が出ました。具体的には、まず戦争の危機なんでしょう。が、今ひとつ、病気とそれをめぐる医療の危機というのもありそうです。つまり、19世紀の半ばにおける病原菌の発見を契機に、新しい化学薬品の開発が本格化します。病原菌をたたくサルファ剤からペニシリンに始まる抗生物質の発見を経て、実に多種類の化学薬品の開発が進んできました。ところが、いよいよそれが限界に来たのか、化学薬品の副作用に悩む人が増えています。そんな時代に、とくにアメリカで「医療大麻」が大きなトレンドになってきました。いうまでもなく、主役は大麻、つまりマリファナです。それが「万病の薬」だという評価が着実に拡大、定着しつつあります。こうした動きにどんな意味があるのでしょうか。

まずは大麻が「万病の薬」だと見なされる理由です。それは、大麻が「ストレス解消」に役立つからです。たしかに、病原菌が原因の病気には、抗生物質が著効を示します。が、現代の病気の多くは、不適切な生活習慣に起因しています。そのなかで主たるものは多様なストレスにほかならない。ならば、それを解消してくれる大麻が「万病の薬」のような役割を果たしても不思議はありません。で、それを吸煙したり、ジュースにして飲んだり、ということが始まっているわけです。

つまり、戦争と共に医療の危機といった問題を考える必要がある。そのことを、大麻に対する評価の変化が意味しているように思います。西洋近代が作り出し、普及させた多種多様かつ大量の化学薬品が、その効用を超えて害毒を流し始めている結果だと考えてもいいかもしれません。

安田

どういうふうな危機があるのでしょうか。ぼくはちょっとイメージできない。西欧文明が行き詰ったとか、西洋文明の没落とか言ってるけど、本当にそうかな。例えば医療の場合、何を契機として西洋の危機なのか。今はアメリカの医療が最先端ですよ。

高田

医療からは少し離れますが、例えばアメリカに、モンサントなどという化け物みたいな多国籍バイオ化学メーカーがあります。遺伝子組み換え作物の種子や農薬などを世界に売りまくっている会社です。こういう会社が撒き散らす化学薬品の弊害が、人間の生活を根底から破壊する可能性は小さなものではなさそうです。あとで少し、議論の対象にできれば、と思います。

さて、この話題からは少しずれるのですが、今夜の安田さんのお話、というか、最後に示された図は、梅

棹忠夫がユーラシア大陸を対象に論じた「文明の生態史観」を、ユーラシア大陸と南北アメリカ、さらには太平洋諸島にまで敷衍した議論であるように思われるのですが、いかがでしょうか。そうした思い込みの上に、安田さんが列挙された長江はじめ縄文やマヤなどの文明の性質を考えると、それらが育まれた場所の緯度は異なりますが、みな森林地帯に発生したものです。

他方、エジプト、メソポタミア、インダス、黄河の、いわゆる四大文明は、すべて北緯35度の線上に芽吹きました。で、この緯度上で地球を一周すると、どこもかしこも乾燥地帯、つまりは砂漠です。ただ2か所、例外があります。日本列島とはアメリカのミシシッピー川流域です。ここには豊かな緑が残されています。当然、縄文文明は森林に育まれた文明だったわけです。

ところで中国大陸に目を移して、麦の文明を生み出した黄河流域と米の文明を生み出した長江流域の医学を比較してみる。すると、寒くて乾燥地帯に属する前者では服を着たまま治療ができる鍼灸、温暖で湿潤な森林地帯に属する後者では医薬の原料となる多種多様な植物素材が入手できるために湯液(漢方薬)の医学が発達しました。

こんな風に考えながら、安田さんの示された地図を眺めると、そこには上記のようなエコロジカル・コンディション、つまり生態的な条件が巧みに投影されているように思われます。

ところで、三本足の八咫鳥、ですか。これもまた、ここでいう長江文明の系譜のなかで生み出されたのだと思います。それは、こういうことです。何か、よく分からないことに出会って、しかし選択に迫られたとき、欧米の文明はコインの裏表、つまりは「二者択一」の方法で決めがちです。それに対して日本の場合、選択肢は「三すくみ」だと考えます。「じゃんけん(石拳)」なら「グー」「チョキ」「パー」です。「むしけん(虫拳)」なら「カエル(親指)」「ヘビ(人差指)」「ナメクジ(小指)」で勝敗、正否を決めます。つまり、ヘビはカエルを食べてしまうけど、そのカエルはナメクジを食べてしまう。そしてナメクジはヘビを脅かす。

これを江戸時代の社会にあてはめてみると、やっぱり「三すくみ」なんですね。武士は政治権力を握っているけど、権威は天皇家や公家や学者世界にありました。で、金力は商人が握っていたわけでしょう？ このように「三種類の力」が「階層ごとに分有」されていた結果、危険な独裁が起こらなかった。その線上で現代日本に目を転じると、非常に困った、というか危険な状態が現出しているように思われます。

そこで再び「二者択一」の欧米に目を転じる。すると、こうした「力の分有」が行なわれにくい。それに比べて森林で生まれた日本の文明は三すくみの構造を内にはらんでいるわけです。こうしてみると安田さんの話に出てきた「三本足の鳥＝八咫鳥」の挿話には豊かな含蓄があるなあ、と思わされます。

ところで稲作漁撈民は、豊かな水がないと生活できません。田んぼをはじめ、その水は川や湖につながっている。だから身近なところで魚が捕れる。ですから長江はじめ大陸の稲作地帯では淡水魚を重用しました。で、それを塩漬けにしたのが魚醤です。

ただ、日本の場合は周りが海なんで、海の魚介を重用しました。で、魚醤のかわりには大豆や小麦などを素材とする穀醤が発達した。が、いずれにしろ身近な水を活用して、じつに見事な循環システムを構築したわけです。

こうした森林地帯では、身の周りに「ありがたいもの」が一杯あるわけで、それらを神とあがめる多神教の信仰が生まれました。それに対して乾燥地帯では、ユダヤ、キリスト、イスラムといった一神教が発達します。

そこで不思議なのがキリスト教に帰依してしまったヨーロッパです。ヨーロッパは森林地帯ですが本来、多神教だったはずなんです。それが、なぜか一神教に蹂躪されてしまった。もともと、ヨーロッパのキリスト教は、一種の多神教だとも言えそうです。いろんな「聖人」を創って、神やイエスに準じるものとして扱う。こうしたことはイスラム教には絶対ありえません。こうしてみるとヨーロッパは、砂漠地帯に適合する一神教に蹂躪されて、不幸なことになったんやな、という感じがします。安田さんのお話を聞きながら、こんなことを考えた次第です。

安田

ヨーロッパは、かつては森の国で、多神教だったんです。彼らは大木を崇拝するんです。落葉のナラの木、オークを崇拝するという世界観を持っているんですが、ヤドリギってありますでしょう。常緑で、年中青々しているものだから、冬、落葉樹の多くが葉を落とした時でも、ヤドリギだけが青々しているものだから、巨木の生命力が結集していると信じている。それで、5月、春先でこれ一番食料の少ない時なんですけど、その時に、ドルイド僧というのが、真っ白な衣を着てオークの巨木によじ登ってヤドリギを取ってきて、みんなに配ったんです。それを家に持って帰ると、病気になるなかつたり、暮らしが豊かになるとみんな信じていた。実は、それと同じようなことが日本の京都でも行われている。「しるしの杉」というのがあって、2月の伏見大

社の初午祭でもらえるんですよ。これ杉の木ですが、もらって帰って家に置いておくといふことがある。

そのヨーロッパの古い風習も、ところが実は、キリスト教がワーッと入ってきた。そして、迷信的な古い宗教を弾圧する。ドルイド僧は殺されて、そして、キリスト教徒は、その聖地に教会を建てた。だから、ヨーロッパの教会へ行ってみてくださいよ。地下に行ったら、大木の根とか泉とかいっぱいありますよ。

荻野

話は、どんどん広がって、万年、千年前とか、すごい文明の話になっている。でも、ここで、この先数十年とか、狭い話に持っていくのは恐縮なんですけど、ちょっと残り時間も迫ってきたので、きょうのテーマに若干戻ってみます。「転換」ということですね。それと、クオリアの今年のテーマが2030年の新たな価値や未来図を模索したいということでもありますので、それにつなげたご質問をしようと思います。

先ほど、安田さんが、文明の転換っていうのは環境の危機ということだろうという指摘をされたのですが、それを前提にさせていただくと、では、そういう環境の中で、われわれの世代はどうやって生きていくのか。例えば、先ほどから出ているモンゴロイドは、ネオテニー(幼態成熟)というのが特徴的で、あまり早く体が固まらないので、環境の変化に対応でき、生き延びてきたんじゃないか、という説もあります。ネオテニーが正しいかどうかは別に、そういうようなことも材料になればと思うんですけど、現代のわれわれは、一体環境の変化に順応していけるのか、どうか。会場からも、それについてのご意見をいただきながら、未来をどう目指すのかということを考えてみたいと思います。会場から、何かございますか。

三木 俊和(大阪経済大学大学院)

11月23日が何の日やという話がありました、そういえば、24日は安田先生の誕生日だったんですね。それは、それで、実は、極東裁判が1946年1月に始まり、その年の4月29日に起訴されて、48年の12月23日が絞首刑の執行日になります。これ、実は、起訴と死刑執行日は、昭和天皇と今の天皇の誕生日なんです。これ、(連合国)が、日本人に「覚えとけよ、わかっているな」と念押しをイメージして日を選んだと思います。今、天皇は、アジアとかで、慰霊の旅にも出ておられます。これらのことについて、安田先生は、どのような感想を持たれ、また、アジア文明圏との関係で、どう思われていますか。

安田

12月23日が、絞首刑の日とは知らなかったなあ。うーん、それを意図的にやったのか…。うーん。

堂免 恵(応用物理学会 産学協働研究会運営委員長)

私も、日本が世界を救うと思っているので、きょうのお話はとても面白かったですけど、縄文文明のころにも、日本語ってあったんでしょうか。7500年ぐらい前に、九州全体が絶滅したって話を聞いたことがあるんですけど、日本って、すごく災害の多い国じゃないですか。その中で、文明の断絶とか起きなかったのか。それと、縄文文明のころには日本語が既にできていて、いつごろから話されていたのか興味を持っているんですけど、いかがでしょう。

安田

縄文人っていうのは、野蛮でね、原始的な生活を送って、日本語のような言葉も発してなかっただろうというのが長い間の考古学会の考えだったんですよ。でもね、これがねえ、北海道の函館の近くに垣ノ島というところがある。そこで、8000年から6000年前、縄文時代の前期から早期の遺跡から出てきた遺物がある。それは、子どもの足型なんです。何と、ちゃんと両足がそろっている。パッと見た瞬間、生まれたばかりの子どもの足型だなと思った。実は、ぼくも孫が生まれたばかりなので、その足型をとろうと思った。でも、生きてる子どもは、動き回って、とても両足を揃えてはとれないわけですよ。

その足型には穴が開いていて、壁掛けにしたりペンダントにしたりできるようになっている。で、それがどこから出てきたか。何と、すべて大人の墓から出てきた。昔は、死産が多かった。大きく成長することがないような子ども、死なせた子どもの形見として足型をとったんですね。足型は、指が一番強く残っているわけですよ。指が硬直しているわけですね。足もちゃんと二つそろっている。これ、死んだ子どもの足型でしかありえない。多分母親は、自分が生きてる間は、大事に大事に持っていて、死んだ時、お墓と一緒に葬られるんです。

そんなすごいメンタリティーを、縄文人は既に6000～8000年前に確立していたんです。そんな縄文人が「うおー」って、原始的な生活をしてたなんてことは、有り得ないんです。日本の考古学者は、そんなふう

にして縄文遺跡を見ていた。だから、とんでもない間違いですよ。それを、戦後70年間、その間違った論理をわっとわれわれに押し付けて、偉そうにも、「お前ら！」って言ってやってたのが、日本の考古学会だったんですよ。それではあかんぞ、と。縄文人のそれだけ高度な精神的な世界というのは、言葉がなければ絶対できませんから。必ず話していますよ。

ところが、「文字がないじゃないか」と反論されます。われわれは、文字にみんな影響されている。文字がことだまあれば文明だと。でも、われわれが大事にしたのは「言霊」なんです。言霊の文明なんです。人類の歴史には、文字を大事にするというと言霊を大事にするという文明があるんです。われわれアジアの人間は、みんな言霊を大事にしたのです。ところが、西洋の文明の影響で、文字がなければ文明じゃないというわけで、ぼくも、長江文明の調査した時には、文字がないか文字がないか、と一生懸命探したよ。

ところが、文字というのは、エジプトでは、書記官がいて文字を大事にしていたでしょう。それは、税金を搾取するために文字で記録したんです。人が人を搾取する手段としての文字だったんです。

とにかく、文字がなかったら文明じゃないというのは、根本的におかしいですね。

山口

つくづく新しく謎として立ち現れてきたのは、「縄文人とは何か」ということです。先の長江文明は明らかに稲作を發明しているわけですね。稲作を發明したから、定住できて文明が生まれている。ところが縄文人は、農耕を發明できてないですから、どんぐりなどの採集をして、それで、1万年も生き抜いた。

長江文明を起こした人たちは、どんな顔をしていたか興味深いです。多分、インドネシア人みたいな顔をしていたでしょうね、中国人ではなく。しかしその人たちが、元来の縄文人ではなさそうだ。稲作を持ち込んでいないから。

多分、縄文人たちというのは、まったく別のルートから入ってきて、別の文明を作ったんだなあと思っているんですけど、どうでしょうか。縄文人のルーツとは何か、もう少し詳しく聞きたいです。

安田

これは、難しいね。ぼくは、さっきも言ったように、これまでは南からのルートばかりだったけど、北からの影響というのも考えなければいけない、ということですね。

山口

もう一つ、長江文明のルーツって知りたいんですね。

安田

長江文明で、ひとつははっきり言えるのは、「森の民」です。

山口

アフリカから旅をしてきた人類は、どっちを通ったんだろう。ヒマラヤの南側を通過して長江に行きついたんですか。北側を通ったんですか。北側は砂漠ですよ。

安田

砂漠は通らないと思う。南を通過してやって来たと思う。

山口

そうすると、黄河文明を作った人間とは全然違う。

安田

そう。長頭と短頭というのがありますね。長頭の人間というのは、北の草原地帯、短頭の人間は南の森の中です。この短頭の人たちが稲作を始めた。土器を作って。だから、短頭の人間は、体は小さいけど頭がいいわけですね。長頭の人間は、でかい体をして草原を駆け抜ける。彼らは、やっつてることが、やっぱり野蛮で粗野だと思いますよ。

だから、マヤやアンデスがやられたわけですね。スペイン人とかポルトガル人が侵略したんですが、「ブタ飼」が行ったわけでしょう。ブタを飼っていた人で社会からはじき出されたような人間が新大陸に行って…。

ところが、新大陸というのはアメリカインディアンとか徳を大事にして人間的にも素晴らしい人間、そういう争わない人間がいたんです。それを鉄砲で銃撃していったわけですね。

高田

日本でも争いごとは発生します。で、ときに相手を殲滅してしまうといったことも起こる。でも、そういう場合には、殲滅した側が、殲滅された側の人を神として崇める神社を建てて、崇りを封じ込めようと考えました。その典型が菅原道真です。彼は京都の当時の権力から疎外されて九州に追いやられ、それで死んでしまう。そんな人物の死霊に恨まれたらたまらない、というので立ち上げたのが天満宮です。ただし、近世になると、こうした考え方が変化したのか。たとえば徳川家康は自ら神になって日光東照宮に祀られました。

でも、本来は殲滅された側が神としてあがめられるというのが本来の姿なんです。こんなふうな対応は、世界広しといえども、日本だけなんじゃないですかねえ。あ、ついで言っておきますと、靖国神社はこのルールを無視しています。その元の形は東京招魂社ですが、ここには、たとえば明治初期、官軍に殲滅された西郷隆盛は祀られていません。という意味で、日本の神道にもとるといってほかにありません。

安田

いいですよ。それを、どんどん広めてくださいよ。子どもの足の親は、これを墓までもっていったんです。子どもの命に対するものすごい愛情が感じられますね。6000年前、今よりはるかにすばらしい英知を持っていたんです。よく、縄文人を野蛮で原始的だなんて言うと思いますよ。

山口

縄文の縄目というのは何を意味してるんですか。

安田

いろいろな考えがありますが、ぼくはしめ縄の始まりと考えております。

荻野

安田さん、環境考古学というお立場で研究をされているわけですけど、過去の人たちはどのようにして、環境の変化に対応してきたんでしょう。

安田

実は、天というのはね、不思議でね、一生懸命考えたら報いてくれるんですよ。応えてくれないというのは、一生懸命さが足りないんです。

それで、過去の年代順を決めるのは、一般的に放射性炭素同位体=C14年代測定法というのがあるんです。が、これ、計算で出すから、いくら頑張っても±20年。これは、合わせると40年の誤差がつくということです。この誤差がついたら人間の一生の時代の一区切りです。

ところが、それをアウフヘーベンするものを見つけるチャンスを、ぼくに、テーマとして天が与えてくれた。それが「年縞」。

ぼくが年縞と名付けたこの写真の縞々。秋田県の一ノ目潟なんですけど、ここでボーリングしています。この湖の底に縞々がずっと続いています。これは何かというと、木の年輪と同じなんです。一年一年の変動がこの縞々一つでわかる。これが今、年代測定の世界標準になった。

ぼくは、1993年にこの年縞というものを見つけたんです。それで、見つけてから、世界の会議でも一生懸命話し、「サイエンス」に論文書いたりしたけど、ヨーロッパ文明は、決して年縞の存在というのを認めようとしていない。今、われわれは太陽暦の中で生きてるじゃないですか。でも、江戸時代は太陰暦ですね。で、西洋文明に支配された時に、ガラッと太陽暦に変えたわけですよ。つまり、どういうことかということ、欧米文明は、「文明を支配するものは、時間を支配する」と考えた。時を支配するものが文明の支配者と考えた。だから、歴史年代の標準をアジア人が決めるなんて、とんでもないというわけでしょう。

この年縞は、上から数えていって縞の100本目は100年前に限りなく近い、1000本目は1000年前に限りなく近いわけです。1万本目だったら1万年前に限りなく近い。だから、1万年前のところを採ってですね、そのころの1年1年の気候変動や環境の変動を理解できるようになってきた。

それで、われわれが何をしているかというと、これは、三つのボーリングのコアを比較してるんだけど、これはね、湖底のサンプルを1センチずつ取っていくわけです。するとその時、次の1センチの間に0.5センチ位の欠落

ができるんです。それで、ボーリングのとき近接したところで3カ所でやるわけです。すると、対比が可能で、欠落のない連続した年縞がダートと採れるわけです。日本は、それが10万年以上連続しているんです。で、それを回収して、過去の気候変動や植生変遷、環境変遷が年単位で復元できる。

これをぼくはずっと言ってきたんだ。だけど、欧米人は、なかなかこれを認めなかった。それを認めたのは、ぼくの弟子がイギリスのニューカッスル大学に行って教授になったからです。そして、2012年にもう一度サイエンスに論文を出して、それで認められ記者発表したんです。さっきも言ったように、ぼくは、1993年に年縞を見つけ、「気候変動を年単位で見ることができる」と言ったけど全然相手にしてくれなかった。ところが、彼が英国の大学の教授になって初めて国際学会で発表したら、「すごい」ということになった。そうして、水月湖の年縞を過去の時間軸の世界標準にしようということになったわけです。

1993年に、ぼくが年縞を見つけ、2013年に水月湖の年縞が過去の時間軸の世界標準と認められるまで、なんと20年ですよ。日本人が分析したことをヨーロッパ人が認めるまで20年かかった。彼らは、「現代の時」を渡すことは決してしない。グリニッジが象徴です。ことほど左様に、ぼくは、ヨーロッパ文明に代わる新しい文明を作ろうなんて言ってるけど、欧米文明をやっつけるのは並大抵のことじゃないんです。

で、ぼくは、こういう年縞というのを研究して、年縞は、地震の層でもあるわけです。何やってるかという、これは、秋田県の目潟の年縞なんだけど、これは1983年の地震層、これは91年の地震とか8枚の年縞があるわけですね。これで、周期性があるのかとか一生懸命研究してるんです。今のところ、周期性はないですね。今まで、過去2万年の間に、196回のマグニチュード6以上の巨大地震があったということはわかるけれども、本当に周期性があるかと言ったら、必ずしも周期性はないですね。

高田

湖にしかないんですか。

安田

湖底にだけあるんです。これ、全部、ぼくらが見つけたものですが、世界の中では、グアテマラのペテシユバトゥン湖、エジプトのカルーン湖、それに死海ですね。日本の福井県にある水月湖、秋田の目潟。これらの年縞を分析しています。同じようなものは、グリーンランドとか南極で見つかっている、氷で。冬できて夏溶けるでしょう氷は。密度が違うので、同じような縞々模様があるんですよ。これは、ヨーロッパ人がやります。でも、グリーンランドや南極には人類は住んでいなかったんです。そんな寒いところに文明は発展しない。文明が発展したのは、熱帯とか亜熱帯、温帯の地域でしょう。こういったところになると、年縞しかない。

高田

やはり四季がはっきりしているから、なんですか。

安田

いや、そうじゃない。そうやってしまったら、もう、ダメなの。年縞を守るためには、森里海の命の水の循環を守ること、それがなかったら歴史を正確に記録した年縞は維持できない。だから、森里海の命の水の循環を守ることが年縞を守ることです。それは、われわれのご先祖が、ちゃんと森里海の命の水の循環というのを守ってくれた。それが、この年縞を保存して、そこに、過去の人間の歴史、気候変動の歴史…を見ることができるんです。

高田

年縞は、文化遺産だと考えるべきですね。

安田

まさにおっしゃる通りです。これから、この研究を通じて、いろいろ過去にあったことを明らかにしていきたいと思っています。

荻野

どうもありがとうございました。時間が来たようです。

では、次のワールドカフェのテーマですが、西欧文明の限界というお話を引き続きテーマにしたらどうか

と思います。それと、きょうは企業の方もたくさんお見えになっておりますね。企業は、やはり欧米文明に負う部分が大きいかと思います。それで、「西洋文明からの転換」それに対して「日本の企業人はどう対応していくのか」というようなこともお話し願えればどうかと思います。

〈編集 辻 恒人〉

第5回クオリア AGORA2015
2015年11月26日 於 楽友会館

☆ テーマ

「西欧文明からの転換～アジア太平洋文明を考える」

▽ワールドカフェ

西欧文明はもう限界を迎えており、次は長江文明に端を発するアジア太平洋文明ということですが、文明の転換は余程の危機に遭遇しないと実現できない、と。ワールドカフェでは、文明の転換について活発な意見交換を展開しました。

▽第1グループ報告 鈴木 祥太（京都大学経済学部）

このテーブルでは、前半はお酒について、東洋と西洋の話をして、日本酒とワインの違いとか、ウイスキーはどうなのかとかいろいろ話をしまして、「西洋文明の限界」という本題に入りました。

西洋文明の中には「奴隷」という存在があるんですけど、東洋ではヒューマニティー的にありえないんじゃないかなって話になりました。それで、そのヒューマニティーを作っているのは宗教じゃないかという話になり、その後、宗教と科学を切り離すということで、西洋文明の基になっている、数学で理解するという科学はできたのではないかと。科学は曖昧さを否定しているところがあるんですけど、曖昧さ、理系とも文系とも言い難い量子力学っていう分野とまあ、ニュートン力学、経済で言うと新古典派といった数学できっちり示すことができるものとの対比を見て、両者に補足性が見つけ合えるのではないかと。

そして、曖昧さという点では、日本の育んだ文化が、なにかしらいい働きをするんじゃないかなという話になりました。

▽第2グループ報告 伊藤 早苗（京都大学文学部）

このテーブルでは、西洋文明の限界ということをお話したので、企業活動とも関連させて話しました。高田先生から、まず、社会学=SOCIOLOGY の訳について、これは「世間話」と訳すべきであるというお話があり、続いて日本酒、日本食、着物など日本文化をどう発信するかを話しました。それで、その時、大事なことは「白黒」をつけないことではないか、ということになり、西歐的な二択を強いられるのはしんどく、第三の道があるという日本的な「三すくみ」こそ、企業で働くうえでもとても心が楽になったりとか、新しい道が開けるのではないかと。

それから、デジタルとアナログという話もしました。これは、西洋がデジタル、日本の職人芸がアナログという見方もあったんですが、例えば、日本酒の醸造を例に、職人芸に頼るだけでなく、数値化した部分も大切で、アナログ、デジタル、これを分けるのではなく、両者をうまく採り入れていくという方向性がいいのではないかと結論になりました。

▽第3グループ報告 池田 達哉（サンスター財団）

われわれのチームは、西洋文明から東洋文明への転換は、企業にとって価値が高まるのか、ということでスタートしたんです。

大変いろいろと意見が出たんですけど、私の個人的な感想としては、これまで日本には、東洋から西洋からいろんなものが入って来たんじゃないか。その中で言いますと、中国から朝鮮半島を経由して入ってきた仏教であるとか、稲作であるとか、そういったものがあるんですけど、なぜ、中国料理が入ってこなかったのか、おお、これは、驚きの発見やなあ、こんなことで盛り上がってしまいました。しょうもないかな。ちょっと、ここで、発表者交代します。

上田 源（同志社大学文学部）

西洋文明は、いわゆる表と裏の二項対立論なんだけれども、祇園のお茶屋遊びであるような、ジャンケンのような三すくみの関係が成り立っている。近江商人の「三方よし」を作ったような、つまり、モノが循環するという形態がある。これ、日本の特殊な経済システムなんじゃないかと、そんなようなことも話しました。

荻野NAO之（写真家）

では、最後に、安田さんにマイクをお渡しして、まだ、話しそびれたこととか、感想とか、何かお話し願えれ

ばと思います。

**安田 喜憲(立命館大学環太平洋文明研究センター長
ふじのくに地球環境史ミュージアム館長)**

この楽友会館というのは、昔、梅棹忠雄先生を中心とした「近衛ロンド」というのが開かれていたんですよ。ぼくは、新しい時代を切り拓くのは、天才がいないとダメだと思うんですよ。梅棹先生というのは、天才だったとっていて、1952年に、「文明の生態史観」というのをお書きになるんです。みんなが欧米文明礼賛の中で、そうじゃないだろう。それはおかしいだろう、と指摘された。それが、現実には、戦後70年経って、やっと認められてきたわけですけども、まあ、やっぱり新しい時代を提言できる人間っていうのは、そうざらには出てこないことです。

だから、その天才を生んだところがこの楽友会館でしたが、その楽友会館にクオリアを中心に、皆さんが集まって、新しい時代を作ろうとされているわけです。まさに、この会が、21世紀の新しい西洋から東洋への文明の時代を切り拓くきっかけになるかもしれませんね。期待をいたしております。ぼくは、このディスカッションだけでも、いい勉強をさせていただきました。ありがとうございました。

長谷川和子(京都クオリア研究所)

安田さんどうもありがとうございました。きょうは、目に見えるようなお話をいっぱいしていただいたので、心にストーンと落ちたという声がたくさんありました。楽しい話題をありがとうございました。

今、近衛ロンドのお話が出ておりましたが、実は、この楽友会館に会場を移した発案者は、京都大学総長の山極さんでした。近衛ロンドというとても刺激的でおもしろい環境で学び、育ったので、もう一回、この楽友会館でコトを起こしてみたいということでした。安田さんのお話で、そのことを思い返し、また、新しい時代に向けて、心を新たにしました次第です。どうもありがとうございました。